

桃葉歌考

何限の解釈

桃葉歌三首之一 晉・王子敬

桃葉映紅花 桃葉、紅花に映じ、

無風自婀娜 無風、自ら婀娜なり。

春花映何限 春花映じて何限なり、

感郎独採我 郎に感じて独り我を採る。

『樂府詩集』四十五、清商曲辭の解題には、「古今樂録に曰く、桃葉歌は、晉の王子敬の作る所也。桃葉は子敬の妾の名、篤く愛するが縁により、之を歌ふ所以なり」と。この詩を現代語訳すると、「桃葉の顔は紅の桃の花に映じて美しい、風も無く温和な陽気におやかな姿をしている。春の花はあたり一面照り映えている。王子敬の君を思つて一枝手折ろう」と。この解が正鵠を射ているかどうかから

ぬが、春華か時に咲く桃花と美しい桃葉を対比して詠じた作である。

朽尾 武

「何限」と言う語について古來研究されているが、江戸時代の吉宗の時代より家齊時代の人である釈大典はこの語について考証している。『詩語解』下(50a)に「何限 無限 馮_レ高何限意。何限 倚_二山木_一、吟_レ詩秋葉黃 言_二詩興無_レ限。城頭何限 太行山。小艇太湖何限 事世貞。解_二釈春風無_レ限恨_一。春風無_レ限瀟湘意。無_レ限心中不平事並言_レ多也。○何限_二当年卓魯情_一猶_レ言_二何童_一也」と同じく釈大典の『詩家推敲』下(42c)においても同じ内容のことを論じている。「何限」には「無限」の意と「何童」すなわち反語、打消語の「何ぞ童に……や」の二つの解を示す。

世貞は明の王世貞であろう。引証文中「馮高何限量」は『唐詩選』五言絶句に唐の文宗（八〇八〜八四〇）の「宮中題」を収めている。

輦路生秋草 輦路秋草を生じ、

上林花滿枝 上林花枝に滿つ。

憑高何限量 高きに憑る何限の意、

無復侍臣知 復た侍臣の知る無し。

釈大典は『唐詩集註』⁽³⁾を著しており、この詩の頭注に「蔣云、含情無限」と記す。「蔣」は明・唐汝詢注、蔣一葵直解『箋釈唐詩選』によつて知られ、この注に暗示を受けたものであろう。

この「何限」はどのように読まれているか、前野直彬『唐詩選』（岩波文庫）では「高きに憑る何ぞ意に限りあらん」とし、「……限りもない思いがこもっている」と口訳し、注には「何限」は、どうして限りがあるうか。際限もないこと……」と解く。無限の意である。目加田誠『唐詩選』（明治書院）において「高きに憑る何限の意」と読み、「何限量」を「無限の感慨」と注す。

『漢語大詞典』（1230a）において「何限」の項目を設けている（『大漢和辞典』不見之）。語義は①「多少・幾何

（いかほど）」②「無限・無辺（かぎりない、はてしない）」とする。いま求めているのは②の解である。

民国・裴学海は『古書虚字集釈』⁽⁵⁾四において「何猶無也何訓無 無亦訓何」と言い、古典の用例によつて実証している。この書は『助字弁略』『古書疑義举例』『詞詮』『高等国文法』『新方言』等の諸書を参考にし経伝釈詞を用いて考証したとする。その考証された文を引用しておこう。引用するに当つて筆者が本文の前後を加えたものがある。

『孟子』梁惠王篇下「畜君何尤、畜君者好君也。趙注、何尤者無過也」（君を畜する尤何からん。趙注、何尤は無過あやまちなき也）。

宇野精一『孟子』（集英社 一九七三）は「君を畜する何ぞ尤めん」と読むがこれが一般的読みである。

『中論』⁽⁶⁾修本篇「詩曰、……何木不死、何草不萎」（木として死れざる何く、草として萎まざる何し）と。この詩は『毛詩』十三之一、小雅、谷風「無草不死、無木不萎」（草として死れざる無く、草として萎まざる無し）と対応する貴重な資料である。木と草が逆になっているが、「何」と「無」が同意であることを示す。

前漢・劉安の『淮南子』十二、道應訓に「譬白公之畜也、何以異於梟之愛其子也。高誘注、梟子長食其母」（白公の畜を譬

ふるに、以て梟うの、其の子を愛するに異なる何からんや。高誘注に梟の子長じて其の母を食う」と。楠山春樹『淮南子』（明治書院一九八八）では、「……何ぞ以て梟の、其の子を愛するに異なるらんや」とする。これに対応するものとして『文子』（文子）微明篇がある。「無以異於梟愛其子也。」（以て梟の其子を愛するに異なる無けんや）と。これも両書の「何」と「無」が対応している。

『淮南子』十八、人間訓篇に「国危而不安、患結而不解、而皆与能同、此從読書雜志所校定（以下小字の注は古注を除き裴学海の注）何謂貴智何謂即無為、……亡不能存、危不能安、則無為貴智。」（国危きに安んずる而はず、患結べるに解く而はず、智を貴しと為す何けん。何謂は無為なり。……亡びんとして存ふ能はず、危くして安んずる能はずば、則ち智を貴しと為す無し）と。「何謂」と「無為」が文中に混用されている例。『韓非子』三、十過篇に「亡弗能存、危弗能安、則無為貴智矣。」（亡びんとして存ふ能はず、危くして安んずる能はずば、則ち智を貴しと為す無し）と。この両書の文は同じ根を持つたものであろう。

前漢の劉向の『説苑』十、敬慎篇「勿謂何傷、其禍將長。勿謂何害、其禍將大、勿謂何殘、其禍將然。広雅曰、然、成

也。勿謂莫聞、莫亦無也、天妖伺人。」（謂ふ勿れ傷く何れ、其の禍將に長ぜんとす。謂ふ勿れ害する何れ、其の禍將に大ならんとす。謂ふ勿れ殘する何れ、其の禍將に然らんとす。広雅に曰く、然は成也）と。「何傷」「何害」「何殘」の「何」は「無」と解釈してよい。有朋堂漢文叢書の『説苑』三六一では「何ぞ傷らん」「何ぞ害あらん」「何ぞ殘せん」と読んでいるがこの読みは訂正すべきではなからうか。

編者未詳の『越絶書』六、外伝紀策考篇「吳子胥乃知是漁者也。引兵而還。故無往不復、何徳不報。何亦無也。互文耳。詩抑篇、無言不讎、無徳不報、文例同此（……故に往くこと無くして復さず、徳何くして報ぜず。何も亦無也、互文なるのみ。詩大雅、蕩之什抑篇に言ふこと無くして讎へず、徳無くして報ひず。文例此れと同じ）。互文とは「無往不復」と「何徳不報」を指し、二句互に相通じ、相補つて意を十分伝えるようにすること。したがって「無」と「何」も互に意を同じくする。

前漢・劉向編『戦国策』二十、趙策に「合従有功、何患不得收河間、從而無功乎、收河間何益也。」（合従して功有らんか、河間を収め得ざるを患ふ何かれ、合従して功無らんか、河間を収むるも益何からん）と。林秀一の『戦国策』（明治書院一九八二）において「……何ぞ河間を収むるを

得ざるを患へん。……河間を収むるも何の益かあらん」と読む。「何患」の「何」は裴学海は「無」とは考えてはいないが、「悪い何し」と読んでよいのではなからうか。

『説苑』二十、反質篇に「夫厚葬、誠無益於死者、而世競以相高、靡財殫幣、而腐之地下。或乃今日入而明日出、此真与暴骸於中野何異」(夫れ葬を厚うするは、誠に死者に益無し。而も世は競ひて以て相高ぶり、財を靡し幣を殫して、而も之を地下に腐す。或は乃ち今日入れて而も明日出さる、此れ真に骸を中野に暴すと異る何し)と。有朋堂漢文叢書の読み「……此れ真に骸を中野に暴すと何ぞ異らん」とを比較すると他の例もそうであるが、読みの歴史と慣習を考慮せざるを得ない。

前漢・董仲舒の『春秋繁露』一、楚莊王篇「悪無故自来、君子不恥、内省不疚、何憂於志是已矣。是、而也」(悪は無故無くして自ら来る。君子は恥ぢず、内省して疚まず、志に憂へ何きのみ。是は而也)と。「何憂」を「無憂」と解するのである。

唐の功臣魏徵らが勅を奉じて編集した『群書治要』五十巻は日本でも平安時代以前に伝来していたらしい。この書の巻三十六の『尸子』処道篇に「孔子曰、君子者孟也。民者

水也。孟方則水方、孟円則水円。上何好而民不從。」(マコト点にしたがって読む)「孔子曰(く)君子は孟也。民は水也。孟方なるとき人は則(ち)水方なり、孟円なるとき人は則(ち)水円なり。上何を好むとしてか民従はざらん」と。「何」以下は「好むところ何ければ民従はず」と読む方が理解しやすい。これも当時の読み方と肯定すべきかもしれないが「何」を「無」と読んでよいと考えられる。

『易』(周易)三、隨に「有孚在道以明何咎」(孚有つて道に在り以て明らかなれば咎何し)と。「何咎」を寛永頃刊の『周易』二(二二)では「何の咎かあらん」(汲古書院影印本)と読み、以来この読みは踏襲されている。同じく『易』四睽に「厥宗噬膚、往何咎。何、無也。無咎則有慶。故象伝曰、厥宗噬膚、往有慶也。」(厥の宗膚を噬む往いて咎何し。何は無なり、咎無ければ即ち慶有り故に象伝に曰く、厥の宗膚を噬むとは往いて慶びあるなり)と。

右裴学海の説を紹介し、それを基本に本文を読んでみた。ただし、「何尤」を「尤何し」と読むのに抵抗ないしは違和感を持つところもある。「何」と「無」が同義のばあいがあり、中国において戦国時代以前にすでに同義の用字法が存在したということが理解できれば当面の目的には

適うことになる。

ここにおいて再び歴代詩における「何限」について考察してみたい。

和^ス下^ス裴^ノ迪^リ登^リ新^リ津^テ寺^ニ寄^中王^{スル}侍^ニ郎^上 杜甫(七二二)七

七〇)

何限^ニ涿^ニ日^ニ作^レ俚^ニ倚^レ山^木

吟詩秋葉黃

詩を吟ず秋葉の黄なるに。

右は律詩の首聯(一・二句)。初めに引いた釈大典の

『詩語解』に見える。「何限」の意であれば「何の恨みか」とするかあるいは「恨むことも何く」とでも読むのであるが、前者の方が良い。「何限」であれば「いつまでも」とでも解すべきであろう。

柳^{ちん}口^{こう}又^又贈^二首^之二^一 韓愈(七六八)八二四

雪^{ゆき}颯^{さつ}霜^{そう}翻^ひ看^み不^分

雪^{ゆき}颯^{さつ}霜^{そう}翻^ひつて^て看^みて^分た^ず

雷^{らい}驚^{おど}電^{でん}激^{げき}語^ご難^{なん}聞^き

雷^{らい}驚^{おど}電^{でん}激^{げき}して^て語^ご聞^き難^{なん}し。

沿^{えん}涯^{えい}一作^一崖^{えい}宛^{えん}転^{てん}到^{たう}一作^一入^に深^{しん}処^こ

涯^{えい}に^沿て^宛転^{てん}と^{して}深^{しん}処^こに^到る、

何^{なに}限^{げん}青^{せい}天^{てん}無^な片^ぺ雲^{うん}

限^{げん}り^何し^な青^{せい}天^{てん}片^ぺ雲^{うん}無^なし。

転・結句の意は「涯に沿ってゆるやかにめぐって深い処に到る、はてしなく広がる青天には雲一と切れも無い」と。「何限」は「無限」の意である。

陵園妾 白居易

顔色如花命如葉。 顔色花の如く命葉の如し。

命如葉薄將奈何、命葉の薄きが如く將に奈何せんとする、

一奉寝宮年月多。 一たび寝宮に奉りて年月多し。

年月多、時光換、年月多く、時光換る、

春愁秋思知何限。 春愁秋思知る限り何からん。

(以下略)

卷四新樂府中の作。「何限」は従来「何ぞ限らん」「何限ならん」等と読まれている。後者は「無限」(限り無からん)を意識しており、詩意を正しく伝えてゐる。古点本では「何く限りをや」(天理正応二年(二二八九)鈔本)、「何の限をか」(大東急承久元(二二九)移点本)、「何の限りをか」(神田本、文永四年(二二六七)奥書本)と読んでいる。これでは意味が解せない。白詩には次の二例が認められる。

心^{こころ}重^{おも}答^{こた}身^み (那波本六十八頁)

因我疎慵休罷早、我が疎慵なるに因つて早く罷むること
と休れ、

遣君安樂歲時多。君をして安樂ならしむること歳時多

し。

世間老苦人何限、世間老いて苦しむ人限り何からん、
不放君閑奈我何。君を放して閑ならしめざるも我を奈

何せん。

「何限」は「何ぞ限らん」「何限ならん」(限り無からん)

等と読まれている。後者は前詩と同じく「無限」の意。

送楊八給事赴常州(那波本六十四一〇)

無嗟別青瑣、嗟く無れ青瑣(宮門)に別るるを、

且喜擁朱輪。且つ喜べ朱輪(貴人の車)を擁するを。

五十得三品、五十にして三品を得るは、

百千無一人。百千に一人も無し。

須勤念黎庶、須らく勤めて黎庶(民衆)を念ふべし、

莫苦憶交親。苦らに交親を憶ふ莫れ。

此外無過醉、此の外酔ふに過くは無し、

毗陵何限春。毗陵限り何き春。

「何限」は「無限」の意。「何限の春」と一般には読まれ

ている。「毗陵の春は無限にすばらしい」の意。

燕霧花 李郢(八四四年前后『全唐詩』五九〇〇三六)

(活字本)

十二街中何限草、十二街中何限の草

燕霧尽欲占残春。燕霧尽く残春を占めんと欲す。

黄花撲地無窮極、黄花地を撲ち窮極無く、

愁殺江南去住人。愁殺す江南去住の人。

「燕霧花」がいかなる植物かわからない。「燕霧」は「え

びづる」であるが同じ物かどうか不明。「何限草」とは一

面に燕霧花が咲き乱れているさまを言う。「何限」は「無限」

の意である。また、李郢の次の詩があり注目すべきであ

る。

邵博士溪亭(『全唐詩』五九〇〇三六)

野茶無限春風葉、野茶無限なり春風の葉、

溪水千重返照波。溪水千重なり返照の波。

只去長橋三十里、只長橋を去ること三十里、

誰人一解枉帆過。誰人か一たび枉帆を解いて過るなら

ん。

ここに見る「無限」は『佩文韻府』一〇五、「何限葉」に

引く同詩において「何限」としている。「無限」と「何限」

が同意であることの証左となる。

柳詩 李商隱（八一三―八五八『全唐詩』五三九〇五〇

—3—

動春何限葉、春に動く 何限の葉、

撼曉幾多枝。曉に撼く 幾多の枝。

ここに引く二句は律詩の首聯である。高橋和巳（岩波中国詩人選集15）の読みである。「何限」に注して「無限におなじ」とする。

李羽処士故里 温庭筠（八五九年前后『全唐詩』五七

八 6722-9）

柳不成糸草帶煙、柳糸を成さず草煙を帯ぶ、

海槎東去鶴歸天。海槎東に去りて鶴天に歸す。

愁腸斷処春何限、愁ひ腸を断てる処 春何限、

病眼開時月正圓。病める眼を開きし時 月正圓。

右は律詩の首・領聯である。「春何限」を「春無限」と解すれば「春爛漫」の意となる。「春幾何」ととれば「春は腸断の苦愁からいかほど経過したか」となるが、前者を採りたい。

荆山夜泊与二親友二遇詩 許彬（八七三前后、『全唐詩』六七八 7765-6）

山海兩分岐、山海兩つに分岐す、

停舟偶此期。舟を停めて此の期に偶ふ。

別來何限意、別れ来しより何限の意、

相見卻無詞。相見て卻つて詞無し。

「何限」を「無限」とするか「幾何」と解するか微妙なところである。「友と別れて限りなく時が経過したなあ」ととれば「無限」であり、「友と別れてよりいかほど経過したのかなあ」とすれば「幾何・多少」の意である。詩の情況からすると前者を採りたい。

以上唐詩を中心に考察したが、ここに近世以来日本人に膾炙していたと思える宋の陸游（字放翁一一二五―一二一〇）の詩を見よう。

南窓擘^ミ黄柑^ヲ一独酌^有感^レ

放翁潦倒鬢成糸、放翁潦倒して鬢糸と成る、

也把花前酒一卮。也に花前の酒一卮を把る。

何限人間堪恨事、何限なり人間恨に堪へたる事を、

黄柑丹荔不同時 黄柑・丹荔 時を同じくせず。

転句「人の間では恨に堪えること数限り無い」の意であろう。あるいは「人の間では幾何ほど恨に堪えねばならぬことがあるうか」の意にも取れる。教示を賜りたい。

次韻无咎別後見^レ寄

平日孟行不解辭 平日孟行ひびろり辭めくすることを解しらず、

長亭況是送君時 長亭況んや是に君を送りし時。

幾行零落僧窓字、幾行か零落す僧窓の字、

何限流伝楽府詩。何限か流伝す楽府の詩。

帰思恰如重醞酒、帰思恰あたかも重ねて醞かもす酒の如く、

歡情略似欲殘棋。歡情略ほほ殘さんと欲する棋の如し。

右は律詩の首聯より頸聯までを引用した。「无咎」は陸游の詩友韓元吉の字。「何限」は「幾行」に対応する語。

「いつまで」ぐらゐの意であろう。「いつまでも」であれば「無限」の意になる。はげ落ちかけた僧窓に書かれた楽府の詩句がいつまで流伝するだらうかの意であろう。このばあい、「何限」は「いかほど」の意であるから「無限」ではないことになる。

これまで「何限」が「無限」に通用する例について検証してみた。此の語を考察しようとする糸口となった表題の「桃葉歌」における「何限」なる語の解釈は「無限」という語に置き換えて行つてもよいことは承認できる。学界ではすでに常識と考えられているがこの語の歴史をもう少し豊富な資料を用いて検証すべきではなからうか。

詩語の解釈は散文に比して難しい。含蓄多くどちらにで

も解釈できるものも少くない。今回引証した詩においても誤つて解釈している可能性も少しとせず、また「無限」と表記すればよいものをなぜ「何限」と表記したかの解明も必要であろう。先に引いた『漢語大詞典』において「何限」を「無限・無辺」と解した例として韓愈の「柳口又贈」(前引之)一例のみを採用している事には何か意味があるのか、先人の研究も再検討して見る必要がある。

今回は『佩文韻府』から多く例を借りた、すなわち、卷四十五「何限」、六十三「何限意」、一〇五「何限葉」に用例を求めた。この書は用例を集めて意義上の分類はしていないが、「何限」という語に関心を持っていたのは事実である。この語の先人の研究を見落しているのではないかと恐れる。何とぞ教示を賜らんことを。

注)

(1) 引用詩文において筆者が私に「何」字に「。」印を付した。また後に引用した裴学海の『古書虚字集釈』の「。」印も筆者が付したもので、平仄の記号ではない。

(2) 『漢語文典叢書1』(汲古書院 一九七九)に長澤規矩也、小島憲之両氏の解題を付して釈大典の『詩語解』『文

語解』、『詩家推敲』等が影印されている。

- (3) 『唐詩選』の註釈書。全七巻、安永三年(一七七四)六月、平安書林文林軒刊。

- (4) ①の解について松井良直(河樂)は『語助訳辞(語)』下28a(享保四年(一七一九)大坂河内屋宇兵衛等刊)、『漢文典叢書6』所収)に「何限」の考証がなされている。

- (5) 十巻、民国二十三年(一九三四)商務印書館刊。台北漢京文化事業有限公司刊本(原本の影印)が入手可能。

- (6) 三国魏・徐幹撰、明嘉靖八年(一五二九)青州刊本(『四部叢刊』上14a)、『叢書集成新編一九』所収「小萬巻樓叢書」等がある。

- (7) 伝周・辛斡撰、唐・徐靈府注。『通玄真経』(『叢書集成新編二〇』所収77上)、『文字』(宝暦八年(一七五八)東都書林文英閣勉勵堂刊 汲古書院影印本)等がある。

- (8) 『四部叢刊』所収明刊本、『叢書集成新編一〇197上』所収「小萬巻樓叢書」等がある。

- (9) 後漢・高誘注、『叢書集成新編一〇九』所収本、宋・鮑彪校注・元・呉師道重校元至正十五年(一三五五)刊本(『四部叢刊』)等がある。

- (10) 『叢書集成新編一八536下18』、『四部叢刊』等所収。
(11) 書陵部蔵金沢文庫旧蔵長寛二年(一一六四)五月十五

日点、文応元年(一二六〇)校点本(汲古書院影印(知495)。天明刊尾張藩本(『四部叢刊』所収)。

- (12) 『四部叢刊』所収宋刊『分門集注杜工部集』八21a)。

- (13) 『全唐詩』三四113840-15(中華書局)、『唐韓昌黎集』九5a106下(明蔣之翘注、萬治三年(一六六〇)覆明崇禎刊本影印、汲古書院)。

- (14) 和刻本『温飛卿詩集』下7b395上(天保四年(一八三三)刊本影印、汲古書院)。

- (15) 和刻本『放翁先生詩鈔』七言絶句12b160下(享和元年(一八〇一)刊本影印、汲古書院)。錢仲聯校注『劍南詩稿校注』11347(上海古籍出版社 一九八五)。

- (16) 注(14)参照。和刻本詩鈔 七言律詩3a108。校注181。